令和３年度

第１回神戸市総合教育会議

と　き　　令和３年４月２０日(火)

１３：４５～１５：１２

ところ　　三宮研修センター８階　８０５号室

神戸市企画調整局教育連携課

１．開　　会

○企画調整局教育連携課長

定刻となりましたので、令和３年度第１回の総合教育会議を開会いたします。

会議の冒頭、事務局から当会議に関連します要綱、要領の改正について御説明いたします。

まず、資料１でございます。神戸市総合教育会議の設置・運営に関する要綱に関しまして、本年４月１日、同会議の事務局を担います当課が、教育行政支援課から教育連携課に職制改正されたことにより改正しようとするものです。

次に、会議の傍聴に関してですが、本日の会議は、新型コロナウイルス感染予防の観点から、傍聴人を１０人に制限させていただきまして、希望者にはオンラインで視聴ができるような形で実施をしております。

資料２、神戸市総合教育会議傍聴要領につきまして、昨今の状況を踏まえまして、今後も柔軟に対応できますよう改正をしようとするものでございます。

事務局からの説明は以上となります。

以降の進行は、市長、よろしくお願いいたします。

○久元市長

ただいまの要領改正につきまして、御意見はよろしいでしょうか。

（異議なし）

それでは、そのようにさせていただければと思います。

２．議　　題

スマホ・ネット使用に関する子どもの実態と神戸市の今後の取組

○久元市長

今日は、スマートフォンと子供がどう向き合うのか、これは非常に重要なテーマです。

その前に、コロナが急拡大をしておりまして、神戸市はまん延防止等重点措置の対象になっています。ここのところ、病床使用率は９割を超えているという非常に医療体制が危機的な状況にありまして、私どもも全力で取り組んでいるところです。その中で、学校現場の御苦労も大変多いのではないかと思います。

コロナとの戦いがもう１年以上になります。神戸はもう既に第４波が襲来していると思いますけれども、第３波が終わってから神戸市内の小中学校ではクラスターが発生していない状況です。

教育現場で、またこれは教育委員会の対応も大きいと思うのですけれども、感染の予防、感染拡大の防止、そして子供たちの学習機会の確保。これらに全力で取り組んだ成果が上がっていることにつきましては、感謝を申し上げたいと思います。

今後、どう推移するのか予断を許さないところがありますが、教育委員会と市長部局がしっかり連携を取って、この１年間の経験をしっかり踏まえ、また、情報をしっかり収集して、しっかりと子供たちのために前に進んでいければと思いますので、どうぞよろしくお願いを申し上げます。

今日はスマホとどう向き合うのかですけれども、これは、神戸市の教育大綱の中でも明確に第６番目、第７番目で触れられているところで、非常に重要なテーマです。

平成２８年にポケモンＧＯの流行がありまして、神戸市企画調整局では、これに関連した有識者会議もつくりました。そこに御参画をいただき、また、子供たちのスマホフォーラムでもコーディネーターもお務めいただきました、この分野の第一人者でいらっしゃいます、今日は竹内和雄先生、県立大学環境人間学部准教授にお越しいただきまして、先生からお話をお聞きし、そしてこの総合教育会議で意見交換をしたいと思います。

竹内先生、どうぞよろしくお願いいたします。

○竹内和雄准教授

皆さん、こんにちは。よろしくお願いいたします。

今日は、貴重な時間をいただきましたので、神戸の子供たちのために頑張りたいと思います。

私自身は、大学時代に神戸の住吉に４年間住んでおりまして、もう大好きな町なのですね。最近いろんな悲しい事件も起こっていまして。こんなことではいけないと思いまして、神戸の子供たちを輝かせたいと微力ながら思っています。全国的にいい神戸をアピールしたいと思っていますので、神戸の子供たちといろいろ関わらせてもらって、すごく彼らはすばらしいので、彼らの力を一緒にみんなと合わせまして大人の責任を今感じているところです。

今日は、「スマートスマホ都市KOBE」フォーラムを今年の１月、３月に実施しましたけれども、そこから分かってきたこと、それから、今考えなければいけないことをお伝えしたいと思っております。

今日は３０分間で自己紹介、私の経験とか神戸の思いなど、それから、子供たちが今どういう状況なのか。特に、ネットという切り口から見たいと思います。

ネットの使い方をお話しするわけではなく、今の子供たちはネットという穴から見ると一番よく見えるのです。昔は、盗んだバイクで走り出したり、いろんな子がいましたけど。今は、子供たちがネットから見ると一番よく分かると思います。

神戸市フォーラムの御報告をした上で、私から子供たちに何ができるか、子供と大人が何ができるかというお話を３０分間にまとめてお話ししたいと思っております。

まず、一つ目です。簡単に自己紹介をしておきますと、私はもともと大阪府寝屋川市の中学校教員です。２５年間寝屋川で子供たちと一緒に活動をしておりました。その後、１０年目ですけれども、今、兵庫県立大学で教職を担当しております。専門は困っている子供への対応ですけれども、今、子供はネットで困っていることが多いので、ネット問題をやっております。サミットやフォーラム、年間３０回ぐらいやっています。それから、アンケートは年間３万人超ぐらいですね。政府とか自治体等での委員等も多数しています。そのあたりから分かってきたこと、国の動向、神戸の動向

をお伝えしたいと思います。

近畿各地で２０１４年、ネットの問題が大きくクローズアップされたぐらいから、神戸それから兵庫、大阪、奈良、いろいろなところでサミットと称して子供たち自身と話し合う活動をしてきました。２０１４年、２０１５年、２０１６年、２０１７年、このあたりから神戸市とも活動しまして、今年は１月に事前学習して３月に「スマートスマホ都市KOBE」フォーラムを実施しました。

今はこういうネットの問題を専門にしている人があまりいないので、大体国、国連など、割と広いところでお話をしますけれども、基本的には、自治体は今は２つです。市単位で関わっているのは神戸と尼崎。今、神戸市と一番頑張って取り組もうと思っております。

次に子供たちについて２つの観点から。低年齢化というところと、一般の子供たちにどれぐらい広がっているかというお話をしたいと思います。

まず、一つ目ですけれども、これは私が委員をしている内閣府の調査ですけれども、スマホの専用所持率です。８歳、小学校２年生で既に６．８％の子がスマホを持っていまして、それがもう１５歳になると９４．５％。ものすごい勢いで上がっています。ですから、もう中学３年生ではほぼ１０割、ほぼ全員持っている状況に今なりつつあります。

これが神戸市です。黄色がほぼ同じ形ですけれども、１２歳と１５歳では国よりもぐっと低いのです。これはなぜか分かりませんけれども、もしかしたら、このデータを取ったところが中学受験とか、高校受験で塾に遠くから通っている子供たちが持っているかもしれないということですけれども。そのうち、神戸も９割。子供たちの半分を超えるのではないかと、今、神戸の子供たちも５割、過半数を超えています。小学校６年生で。過半数を超えることはものすごいことです。「みんな持ってるもん。」と子供は言い出します。それに弱いですよね。「私だけ持ってへんかったら、お母ちゃん、いじめられんねん。」と言うとみんな持ってしまうので、非常にターニ

ングポイントになっていると思います。

少し皆さん考えてほしいのですが、８歳児の小２で６．８％、７歳児の小学校１年生は一体何％所持しているか。少しお隣と相談していただけますか。

○今井委員

２年生と変わらないと思います。

○竹内和雄准教授

６％ぐらい。実は１３．３％。

○今井委員

増えているのですね。

○竹内和雄准教授

小１のほうが多いのです。これはなぜだと思いますか。よく分かりませんよね。なぜかといいますと、よく分からないけれども、もしかしたら育児に使われている子供たちが多くて。スマホネイティブ、親がもうネットを子供に与えている。小さい頃から与えている。だから、昔、僕は母親が働いていたので鍵っ子と言われていました。鍵をぶら下げて。今はスマホっ子と言って、スマホをぶら下げている子も増えつつあって。どんどん基本的にはスマホの専用所持率が上から下がってきていますよね、おっしゃっていたように。それが、今は下から増えていく時代がこれから来るのではないかと。スマホネイティブの育児、それ自体は悪いこととは僕は思いません。しかし、使い方によってはというところが、今増えているのが国の調査からも分かっています。

Ｓｏｃｉｅｔｙ５．０、私は総務省と関わっていますけれども、今から３年前に総務省が作った動画、よくできているので見ていただきたいと思います。３年前は夢物語として作ったことが、今、３年後どうなっているか。まず、Ｓｏｃｉｅｔｙ５．０を聞いたことがありますか。

○山下委員

あります。

○竹内和雄准教授

これは何かといいますと、Ｓｏｃｉｅｔｙ１．０、狩猟社会から始まって、農耕社会、工業社会。今、私たちは情報化社会にいて、これからは超スマート社会という、ネットを使ったスマートな生き方ができる世の中にしていかないといけない。それを標榜して総務省がつくった動画です。少し見てください。１分程度、イメージ動画です。

（動画視聴）

○竹内和雄准教授

これは、自動運転しているタクシーに乗っているのでしょうね。当時は珍しかったわけです。

これはおじいちゃん、おばあちゃんがドローンで農薬散布していますね。

これは遠隔医療です。コロナで今、大分普及してきましたね。

これは田舎のお店でキャッシュレスの決済ができていますね。

これは翻訳です。この辺まで全部できていますね。

これはお姉ちゃんと話しています。もう技術的にはいけるそうです。ドローンも少し上げて撮影して。

離れたところから、おじいちゃん、おばあちゃんを喜ばすことができる。

これは３年前では夢物語だったものが、今、ほぼ、現実化していますよね。少しお隣と意見交換してください。どうですか。

○梶木委員

大分できています。

○竹内和雄准教授

できていますよね。

○梶木委員

遠隔医療などコロナで一気に進んだ部分もあると思います。

○竹内和雄准教授

まさにそのとおりで、コロナで加速しましたね。１０年コロナが進めたと言っています。コロナが進めたのはいろんなものがありまして、ＧＩＧＡスクール構想といって、学校に一人一台パソコンが入りましたよね。これからどんどん加速していきます。

神戸は、「スマートスマホ都市ＫＯＢＥ」といって、今から３年前に市長と子供たちと一緒に話し合ったのですが、スマートにスマホを使っていこうというところを標榜しましたけれども、まさにその時代が今きました。

もう禁止だけでは無理です。その頃はスマホを使わさなければいいという声がありましたけれども、もう無理です。

とはいえ、いろんな事件が起こっています。　子供に禁止はもう非現実的です。とはいえ、自由放任もあまりにも危険です。だから、３０か、８０か、５０かという当たりを私たち大人の責任として考えていく必要があるのではないかと。

神戸はもう３年前から世の中に先んじてスマートスマホ、スマホの使い方を子供たちと、それから市長と一緒に考えた場がありました。少し早過ぎてあまり話題になりませんでしたが、今現実的に、これから考えていかないといけないという方向です。

今回、スマホフォーラムをするに当たって、この１月にアンケート調査を２，０００人でしました。多分現存する今のアンケートの中で最新です。２，０００人を超えているので。いろいろなことが分かりましたので少し見ていきたいと思います。

まず一つ目、携帯電話の所持率ですけれども、これも驚きました。中学校でもう７割、８割。３年前のときは、過半数まだいっていませんでした、中学生でも。一気に進みました。

それから、女の子でもう８３％。一番重要なのはここで小学校６年生の女の子が５３％なのですね。「みんな持ってる。」と言い出します。だから、小学校６年生は過半数を超えたことで一気に増えて、６年生が増えたら「お姉ちゃんは持ってる。」となるでしょう。女の子たちから始まって男の子たちもどんどん携帯電話、スマートフ

ォンを持ってくるような世の中が出てくるでしょう。ちょうど今から３年前、中学校に広がり出したところです。

続いて、日常的にネットにつないでいる子、小学校６年生の男の子。一体どれぐらいいるのでしょうか。少しお隣と相談してみてください。

どれぐらいだと思いますか。

○正司委員

８割ぐらい。

○竹内和雄准教授

８割ぐらい。実は９１．８％なのですよ。だから彼らにとってスマホはほぼみんなやっているのですね。でも、そんなにやっているように思えませんね。では、何でしょうか。

○梶木委員

ゲーム。

○竹内和雄准教授

そう、ゲームです。オンラインゲームにつながって、荒野行動やフォートナイトなどいろんなことをやっているので、子供たちにとったらもうネット。それから、ゲームだからいいじゃないか、一人きりでやっているからではなくて、彼らはそこに５人ぐらいで組んで、ボイスチャットといって「いくぞ。」と言ってしゃべりながらやっており、部屋から叫び声が聞こえる。

誰がいるのかと思ったら、ネット、向こうに人がいるという感じで。ちょうどコロナで寂しいので、みんなで、５、６人で常にやっていたことがあって、一気にこれも加速した感があります。

ネットで一番よくつなぐのは、中１ぐらいでスマホに乗り換えるのですが、女の子は何年生ぐらいでスマホが一番になると思いますか。

６年生、もう少し早い。５年生からもうスマホが入るのですよ。第一位のテレビ、

驚きませんか。僕、びっくりしました。何か分かりますか、テレビ。

○梶木委員

Ｎｅｔｆｌｉｘ。

○竹内和雄准教授

そう、Ｎｅｔｆｌｉｘ。Ａｍａｚｏｎを見たり、鬼滅の刃などもＡｍａｚｏｎで見られるので。テレビで見ている子が今すごく増えてきました。

ファイヤースティックか何かでやっているけども、家庭に普通にネットが使える。ＹｏｕＴｕｂｅをテレビで見るなども今どんどん増えてきているので、時代がどんどん変わってきています。

家で一番すること。ネット、テレビ、遊び、勉強。大体小学校４年生は、４分の１ずつです。何かが増えて何かが減ります。もうびっくりしました。一体何が増えて、何が減るのでしょうか。

○今井委員

テレビが減る。

○竹内和雄准教授

テレビが減る。何が増える。

○今井委員

ネットが増える。

○竹内和雄准教授

ネットが増える、すごいでしょう。中３になったら安心してください。勉強がぐっと増えます。とはいえ、５１％がネットが一番多いというわけですね。子供たちにしたら、かなわない状況だというのは子供たち自身も感じています。

それから、ネットで一番何をするのか。少し時間がないので飛ばすと、男女とも動画を一番よく見ると。ＹｏｕＴｕｂｅですかね。男の子はゲーム、女の子はＳＮＳがどんどん増えていっているという状況です。

子供らはよく、「僕たちは勉強もすんのや。」と言うけど、勉強を一番する子は、小学校５年生なんかは勉強を一番する子は約２割いるのですよ。そういう通信教育などでやる子もだんだん出てきている、塾の代わりに。

今、僕の教え子はＺｏｏｍで家庭教師をしたり、ピアノをＺｏｏｍで教えるという子もだんだん出てきて、何か時代かなと。コロナでそんなのも増えてきたりもしています。うちの息子は、フィリピン人から英語を習っています。Ｚｏｏｍで。安いと言って。

ネット接続時間４時間。４時間というのは、これは実は非常に大きな数字で。週に３０時間ネット接続を超えるとネット依存になる確率が非常に高いという海外の研究結果を神戸大学の曽良先生にお聞きしたのですが。４×７＝２８。大体４時間を超えたらというのが小学校４年生でもう１４％いるのですね。これが中学２年生では３割ぐらいいると。だから、中１、中２ぐらいの女の子、男の子も今、ネットの接続する時間。時間だけではないですけど。勉強に使っている子もたくさんいるので、このあたりについて少し考えていかなければと思います。

４時間以上使う子はどんな子かと神戸の子供たちに調べてくれと言われたら、表の白い部分は４時間以下の子です。黒い部分が４時間以上の子です。４時間以上の子は１２時より遅くなる。けんかやトラブルがある。メッセージは１分以内に返信する。１分ですよ。僕、３日ぐらい返さない。何で１分なのですかね。子供らに聞くと、特に女の子は「返さんと何か思われる。」と言うわけです。ものすごくつらい。

だから、その辺に、「何でなん。」と。ラインはすぐに返信すべきだと。気になるとか。誤解されてけんかになったこともあると。このＳＮＳ等について、子供たちはものすごくいろいろなことを考えているみたいです。

ネット依存はどれぐらいいるかを調査してみました。そうすると、国の調査では２０１８年に大体中学生で１２％ぐらいだったのですが、これと全く同じ調査を今回やってみました。これが１２．４％ですね。小学校４年、この辺は少ないですけれども、

中学生になるとぐぐっと増えます。「中学生の女の子、何でこんな多いんや。」と言うと、「やることないもん。」と言ったりします。

これを発表したときに市長が非常に心配されて、「神戸市、何でこんなに多いのか。」と市長と目を合わせてあたふたしましたけど、神戸だけの問題では全くないです。日本中がそうですね。コロナでネットしかないから。神戸市は１６％ですけど、近隣では２０％を超えています。神戸市はまだ持ちこたえているかもしれませんけど、これがいつどうなってもおかしくないので、このあたりは非常に注意が要ると思います。

２０１９年にＷＨＯが改正してゲーム障害が正式なネットの病気になったのです。ほかのネット依存は実は俗語です。ゲームに夢中な子、病院が受診できるようになるので、２０２２年から保険が利きます。日常よりゲームを優先して、健康等にもよくない影響、友達、家族などにも悪影響し、１年以上続くことがあるけれども、その子たちが、今どんどん予備軍が増えていっている、そんな状況があります。

あと、子供たちが考えたアンケートで、神戸の渚中学校の子供たちが作ってくれましたけど、これはよかったですよ。後でしっかり議論したいのですけれども、友達に満足していますか、家族に満足していますか、自分に満足していますか、社会に関心がありますか、海外に関心がありますか。これに、ネットの接続時間と比べました。

例えば、社会の関心。ネットが増えたらどうなるか。近くでしゃべっていただけますか。どうですか。

○今井委員

興味のあるものばかり見てしまうので減る。

○竹内和雄准教授

興味があるものばかり見るので、かえって減る。実はそのとおりです。

ネット接続時間が大体１から２時間の子どもが、関心や満足度が実は一番多くて、接続時間がそれ以上長くなると感心や満足度がどんどん減るわけです。また、おもし

ろいことに、１時間の子らはさらに低いわけです。だから、ネットをすると世界は狭くなることも言っていました。

こう見ると、親への満足感も下がる。友達への満足感も下がる。これについては、「友達や家族とうまいこといっていないので、現実逃避のためにネットにいくんじゃないか。」と中学生が言っていました。現実逃避だと。少し驚きました。それと、もう一つは、２時間ぐらいがちょうどいいのではないかと子供たちは言っています。１時間ぐらいよりも、２時間ぐらいが適度なのかなと。僕らは適度は３０分と思いますけどね。でも、彼らにとったらネットが唯一の心の休まるところになっているわけです。だから、１時間ぐらいだったらお母ちゃんに怒られてストレスがたまっているのではという子もいます。

嫌な投稿を見たらどうするか。これが、小学校６年生、５年生、神戸の子は止める子が６割いるのですよ。この後どうなると思いますか。止める、嫌な投稿を見たら「やめとけ。」と言う。

○正司委員

だんだん止めなくなるのではないか。

○竹内和雄准教授

だんだん止めなくなる。そして、何もしない子。これが増えるのです。

子供らに聞くと、「何でやねん。」と。「止めると自分がやられんねん。」と。だから、文科省がよく言うのが、傍観者になるなと言うけど、それにならなくて止めて、自分がやられたらどうするのだという話で。「先生、難しいねんで。」ということを言っていました。子供たちは、もう今の自分たちは限界で、一緒に考えてほしいというところをしきりに言っています。

そういうことを神戸市フォーラムでお話をしました。集まったのは、神戸の５つの小中学生でした。ネットの話など、大人と話をしたり、これからの取組を話したけれども、いろいろな提言を子供たちはしてくれました。

例えば、保護者には、いきなり没収ではなくて考えてなど。決めたことはお互いが守ってというわけです。お母ちゃんもいい加減ではないかと。納得のいくルールをお互いでつくってほしいというのですね。それに、反抗期だけど、同じ家で同じ時間を過ごしてほしいと。これは切ない声でしたね。要するに、一緒に考えて納得できるルールづくりを親としたい。お母さんもルールを守って。これは特に言っていました。「お母さんが一番スマホばっかりやってるやんけ。」と言っていました。それから、「スマホより私を見て。」といった子がいたので、なかなかよく言えるなと思いましたけど。このあたりが、もしかしたら本音かもしれません。

先生たちに対しては、生徒と先生が一緒に使い方を考えたい。それから、相談ポストをつくりたい。ネットについて面談をしたい。とにかく、彼らは一緒に聞いてほしいということを言っていました。直接言いにくいので、先生にそういう時間をつくってほしいなど。あとは、授業の中で実感のこもったものと言っていました。だから、相談に乗ってほしい、面談をしてほしい、授業の中で教えてほしいという思いを、まさか子供たちから聞くとは思いませんでした。３年前は「こんなことは私らは分かっているけど、大人は黙っとけ」という感じでしたけど、この３年であっという間に変わりました。非常に驚きました。

企業に対しては、小学生にはスマホは早過ぎるからと小学生が言っていました。それから、ＡＩで悪口を自動削除できたり、年齢に応じたアプリをつくったり、ＡＩを活用したりしてほしい。

一番おもしろかったのは、自分たちで、生徒会でスマホの授業をつくりたい。後輩に言いたい、小学生が自分たちの後輩に教えてあげたいなど。悪口を書いたらペナルティーを与えたり、ネッ活ウィークを月１ぐらいでやりたいと。子供たちは、自分たちが考えて後輩に言いたい。先生ではなくて自分たちが言いたい、自分たち自身で取り組みたいということをしきりに言っていました。

それから、市への提言。僕、笑ってしまいましたけど、ポスターやテレビで家族の

大切さを発信してくれと。ネットトラブルの恐怖を広めてほしいと。それから、アプリでポイント制にして悪口を書いたら減って、いいことは増えて、悪口リストは自分たちで考えるから。もしも悪口リストにあることは、本当に送っていいですかみたいなことを書けばいいんだということを言っている子。あとは、これはまた後で言いますけど、アプリをつくりたい、こんなことを言っている子もいました。

市への提言は、今、神戸市、うちの学生たちが年間１００回ぐらい、いろいろなところに授業に行ったりしていますけれども、そういうネットトラブルの授業をきっちりやってほしいということ。あと、アプリをつくりたいということが出てきました。アプリをつくりたいと子供たちが言っているところを見てみましょう。子供たち自身が言っているところです。正直、子供たち自身に時間をあげて何か提言を考えてと言ったら、１５分ぐらいでしたか、これはその場で考えたもので少し驚きました。子供たちからの提言です。

（動画視聴）

○竹内和雄准教授

誰のやらせでもなく彼らが自分で考えたのですね。子供だからくだらないことも言うし、いろんなことも言いますけれども、基本的に大人がもう真っ向から子供扱いせずに受け止めたのは、僕は本当に感動しました。

（動画視聴）

○竹内和雄准教授

これはすばらしかったです。だから、しっかり考えろと。規制だけではないということを大人が言ったのは、少し驚きました。

（動画視聴）

○竹内和雄准教授

子供が喜んで、いっぱい僕にメールをくれて、先生、ほんまにできるのか、と言って。

見ていただいて分かるように、何かを子供たちにさせるのではなくて、子供たちが今きゅうきゅうで自分たちだけではもう難しいと言っているので、そこに私たち自身がどうしてあげないといけないかというフェーズに変わってきていると思います。子供だけでは無理で、大人と子供が一緒に、自分たちでは無理だと明確に言いました。反抗期の子供らは言いません。お母ちゃんも、反抗期だけど一緒に過ごしてほしいと、注意してほしいと言っていました。

条例のことでも、私が「ゲームは１日６０分と決められるような条例は反対やろう。」と言ったら、「いや、でもあったらやめようって言いやすい。」と言うわけです。でも、彼らは勝手に決められるのは嫌なので一緒に考えたいなと言いました。

もう一つは、大人は協力者なので、自分たちが進めたいプロジェクトチームができないかなと。実際使ってアプリをつくるとか、昔スマホ三カ条をつくったそういうのをやるとか、ポスターとか、ＣＭとかをつくりたい、そんなことを言っていました。

その場にユニセフの方もおられました。私、今ユニセフと一緒に全国６か所、熊本などでやっています。彼らのことは、非常に僕はすとんと落ちています。子供たちにも伝えました。

ネットは道路と同じだと。使わないと事故は起きないけれども、使わせないのはもう無理だと。交通ルールが必要だと。それよりもっと重要なことは、交通ルールを守っても事故は起きているわけです。１時間に１人、１回ぐらい、死亡事故が起きているということですね。だから、ある程度の危険はしようがない。でも、交通事故とネットの違いは、人間がまだ防げるところにあるので、子供たちと一緒に考えていったらいいのではないかと。社会の責任でルールを考えていくべきと。そのルールの中にもネットなのでアプリをつくり、条例がいるのかどうかは分かりませんけれども、子供たちは何かそういう基準が欲しいとしきりに言っています。

「スマートスマホ都市KOBE」を３年前に取り組み、当時はまだ早かったのかもしれません。今、まさに世の中の基準になって全国のモデルになるのではないかと今日

は思っています。

以上です。ありがとうございました。

○久元市長

どうもありがとうございました。

竹内先生への質問、あるいは御意見でも自由に。

一つだけ付け加えさせていただくと、竹内先生がおっしゃったけれども、３年前、子供たちはとにかく邪魔しないでくれと。自由に使わせてくれと。ネットの世界はリアルな世界だと言って演説をした子供もいたのですけど。それが、この前のフォーラムでは、今は少しやばいと。ところが、自分らだけではなかなか解決できないので、とにかく助けてくれとは言わなかったけれども、今のままではよくないので、大人も一緒に相談に乗ってもらって、このネットに依存をしている状況から少しでも脱したいと。

それで、いいかどうか分かりませんけれども、行政で制約してくれと言うわけです。悪口を言わないように行政がしてくれと。

○竹内和雄准教授

言っていましたね。びっくりしました。

○久元市長

そのようにだんだんなってきていると。一言だけ付け加えさせていただきます。

今井先生、いかがですか。

○今井委員

ありがとうございます。フォーラムは動画で私も見せていただいて。

○竹内和雄准教授

そうですか、すごかったですよね。

○今井委員

すごかったです。本当に、子供たち、小学生、中学生とびっくりするくらいものす

ごく一生懸命考えて、みんなで話し合って。それが、しかも楽しそうですよね。そこがすごくすばらしいし、そこからいろいろなものが、プランであったり、いろいろなすてきな考えが生まれて発表するというすばらしさは本当に見ていて涙腺がうるうるとくるぐらい感激しました。

○竹内和雄准教授

僕も感激しました。

○今井委員

ありがとうございます。

一つ思ったのは、あのフォーラムは数校が参加いただいて、その中の一部の生徒が御参加いただいているのですけど、もっと広く、神戸のあの学校のほかの子供たち。あるいは、ほかの学校の子たちをもっと巻き込んでいくためにはどうしていくのがいいのか、お聞きしたい。

あるいは、先生はもっといろいろなところで関わりをお持ちなので、あそこに出てくる子たちは特によく考えている子なのか、ほかの子たちだってもっと考えているのか、その辺の肌感をもし感じているところがあったら教えていただけますか。

○竹内和雄准教授

神戸の子は、あそこに出ている子は普通の子です。　だから、彼らは自分の言葉で自分の思いをしゃべれる子だから盛り上がったのだと思います。普通は、生徒会の子らが出てくると、何々するべきとか、こうあらなければならないみたいなことを先生の顔色を見ながら言いますけど。いいのか悪いのか、横に先生がいますけど、「先生、スマホを知らんし。」と言うわけです。

だから、僕の感覚的には、神戸の子らは先生に押し付けられて何かをしてとか、何か言わされているという雰囲気は全くなかったです。だからチャンスかなと。子供たちがたくさん言っていたのは、自分たちに話し合う時間が欲しいと。自分らに仕切らせてほしいというのをしきりに言ったので。もしかしたら、そういう時間を彼らに与

えてあげればできるのではないかと。

ただ、子供なので全部はできないので、お膳立ては要ると思います。話し合うきっかけ、そういうのは要るのではないか、できるのではないかと強く思いました。

○久元市長

正司先生。

○正司委員

私も動画を見させていただいていたので、今井委員と全く同じ感想をもちました。

あのアンケートですけれども、アンケートはクレジットが竹内研究室という形になっていました。けれども、先生が聞くと生徒はもうちょっといい格好して答えてきそうな気がしました。そこであの数字が実態に近いと考えればよいのか。実態はもっと大きな数字だけど、アンケート上はあのように出ているのか。そのあたりを御存じなら教えていただきたいのですが。

○竹内和雄准教授

大阪のある私学がアンケートを取ったのですね。そしたら、高校生で２時間超えている子が１５人しかいなかったのです。ネットの使用時間が。それは、先生がにらみをきかせながらアンケートを取っているのです。

神戸の子は、４時間超えている子が３割を超えています。いい意味でも、悪い意味でも、彼らは本当のことを書いています。だから、衝撃的なデータを答えるわけです。アンケートで忖度していないから、実態に即した数字が表れているのではないかと思います。

今、僕はいろんなことをいろんなところで言われますけど、そういう意味で言うと、神戸の教育は非常にうまくいっているのではないかと僕はその点では思っています。

○正司委員

そうすると、あの数字は衝撃だったけれども、逆に言うと、あそこまでいっているから事態の深刻さが。

○竹内和雄准教授

そうです。

○正司委員

子ども達も自分ごと化しているのかと。彼ら彼女らが先生方にいろいろ注文しているのって、まるで先生方が我々教育委員会に研修の内容をこうしてくれというのとよく似ていると思いながら聞いていました。子供たちだって一個人としてみんな困っているということが分かったので、全体を変える契機を迎えているのではないでしょうか。転換のためには、ファシリテーターを入れた、グループワーク的な議論をいろいろなところでやっていくのが大切だとも思いました。

そこで次の質問ですけど、よいファシリテーターがいないと，議論がなかなかうまく回らないのではと思うのですが，そのあたり、何かお考えはありますか。

○竹内和雄准教授

いえ、できます。最初に回すときは要ります。だけど、回り出したらできます。

そのときには３つ大きな要点があって。１つは、考えるためのきっかけがあること。今回の場合は、アンケート結果があるから、これは言っていいのか、言ったらあかんのかということがあるので、考えるためのきっかけ。今回の場合はアンケートでした。それがあること。

２つ目、自分の考えを言っていい自由が保証されること。一番まずいのは、スマホを４時間やっている子が、後から、「おまえ、あんなこと全体の場で言いやがって。」と先生から怒られるようなときはできませんけれども。そういうモードを一切僕は感じなかったので、自分の意見表明をするときにできること。

３つ目が、誰か特定の人の意見、声の大きい人の意見に流されない。「俺はネットは２時間や。」、「何で短いねん。」など誰かとけんかするのではなくて、「いや、俺はこう思う。」「私はこう思う。」という考えるためのことが保証されていること。それが今あそこにいた子らは、先生方と一緒に主体的で対話的な深い学びが保証され

ているのか、分かりませんけれども。僕はもともと中学校の国語の教員なので、あれは僕の授業なのです。中学校のときあんな授業をしていたのですけど。だから授業が非常にしやすかったのは、それぞれが人間的に尊重されている。そのムードがあればファシリテーターは誰でもできます。

その３つをいかに保証するかです。それは難しいようで簡単で、簡単なようで難しいです。でも、今のあそこにいた５校は、僕でなくてもできるかと思いました。

神戸市教委の方、それから、神戸のいろいろな市長部局の方が、各学校に２人ずつ学生を配備してくれているわけです。そこに交通費も出してくれて、若干のいろいろなものを出してくれて。だから、そういうのがあって、みんなが僕らのためにやってくれているのだということを彼らが感じているので動いたところもあるので。形さえできれば、すごくいけると思います。

○正司委員

仕掛けが、いるわけですね。

○竹内和雄准教授

仕掛けは要ります。必ず要ります。だから、その仕掛けを誰かが、今の場合、私、少しだけできますので、それをやったらいいかと。

もっと言うと、子供たちが今、何かやろうと言ってその後もいっぱい先生を通して僕のところに電話がくるわけです。「うち、来て。」と。「先生、うちの学校でこんなんするから、先生、大学生を来させて。」と。僕、半分リップサービスを言ったのですけど。「うちも来て。」「うちも来て。」半分リップサービスで、普通彼らは来ないですけど、本当に彼らは来てびっくりしたのですけど。

これがある中学校が自分たちのクラスの各代表を集めてネットの学習会をするわけですそこには学生が４人行ったのかな。「僕ら行ったるからって約束したから、行くんや。」と言って行ったのですけど。彼らはその後どうするかというと、自分のクラスでその後、そこで学んだことを各クラスで話し合って。十分できたっていいます。

だから、私はこの種のものは、今、打ち上げ花火的にばんと上がって終わることが多いですけど、定着させるためには、何かそういう仕掛けをやっていけばいいのではないかと。

例えば、よくやるのは、区ごとにその学校の代表が集まって、また下げてみたいなことができればすごく回るし、子供たちはネットの問題を、まさに今みんな相談したい、考えたい思いを持っているので、だからチャンスなのかとは思います。

○本田委員

私もフォーラムを見せていただいたのですけど、今回、やっぱり市長がおっしゃっていた３年前と全然違うというところで、子供たちが、自分たちが経験してきて困ったことがたくさんあって、やっぱり相談したいという気持ちがあって、そこのタイミングに合わせて介入していくのはすごく大事だと思ったのと、子供たちは大人たちより自分たちのほうがスマホのことも知っているし、多分少し上だと思っているところもあると思うのですよね。なので、セルフケア能力とか、ライフスキルを上げるというところにおいて、今関わっていくというのはすごくいいことだと思ったのと、あと、「お母さんもやってるやん」という話がありましたけど、親子一緒にというのはすごく大事なのかと思っていて、私、小児看護とか家族看護の専門ですけど、お母さんたちがずっとスマホを見ていて、スマホの画面を見ていて子供を見ないという育児的なところでの問題もやっぱりありますし、家庭が、お父さんもお母さんもスマホを見ているので全然しゃべることがないというところも、家族というところでも一つの問題として上がってきているところかと思うので。

多分、親に言いたいこともすごくたくさんあるだろうし、親子のもありましたね。

○竹内和雄准教授

ありました、ありました。

○本田委員

フォーラムの中でも。

○竹内和雄准教授

すごく言っていました。

○本田委員

あれってすごく大切だと思っていて、家族の時間を大切にするというのにも広がると思いますし、すごくいいと思ったので、こういう学校だけではなくて先生との対話だったりとか、親子の対話だったりとか、そういうところを大事にできたらいいと思って見させていただきました。

○竹内和雄准教授

付け加えですけど、子供たちがしきりに言っていたのは、反抗期だけどって言うのですよ。反抗期だけど、やっぱりお母ちゃんとしゃべりたいと。だから、ネットばっかり見ないでというのを、たまたまそこのお母さんと娘が同じ会場にいたのですけど、非常にばつが悪い感じにしながらもあれは本音を言っていましたね。

その場合は、親と一緒に考えたいと。それから、先生と一緒に考えたいということを彼らが言っていたのが非常に印象的でした。

（動画視聴）

○竹内和雄准教授

そういうことを言いたい年頃なのですよ。でも実際そういう部分もあるのですよ、彼らは。だけど、できない。できないから、「おまえら、できひんやろ。」ではなくて、一緒に考えようなって言い続けることが大事ではないかと。そういうことですよね、本田先生。

○本田委員

この子たちがまた、新しい小１、小２の子を、次、教育側に回るというのがすごくいいと思って聞いていました。

○竹内和雄准教授

そうですね。だから、この子らが小学校に行って授業をするというのは僕はベスト

だと考えていて、それを支援する取組をしたいと思っています。

実は、神戸市教育委員会と一緒に教え合い学習と言って、今から４年くらい前に６年生が１、２、３、４、５年生のところに教えにいくという授業をしていたのです。当時は画期的だと思っていろんなところに言ったのですけど、どこも「ふーん」で終わったのですね。やっと時代が来たかと。時代が来たと思ったら、その取組はもうなくなってしまったのですけど。室内小学校などいろんなところでやったのですけど、非常にそういう取組がこれからいるのではないかと思っています。ありがとうございます。

○山下委員

大変熱心に取り組んでいただいて本当にありがたいと思います。また、神戸の中学生のポテンシャルを十分に引き出していただいたのではないかと、非常に感銘を受けました。

今、おっしゃっていただいた最後のところで、教えに行くということ、すごいいいと思いました。一方で、もう少し例えば小さいグループで縦のつながりを活かして、ちょっと困っていることなどを、実感を持って話し合うような、いわゆる依存症の部分もあるので、セルフヘルプグループですね。そのようなことが子供たちの中にあってもいいかと思います。

やっぱり手だては多層的、多元的に設けておいたほうがいいと思うので、もし、何かよい実例があったら教えていただきたい。

もう一つが、今問題になっているのはいかにコントロールするかということですけど、大学生もなかなか大変な、竹内先生も御存じと思いますけど、依存したり、トラブルであったりと。大分使いこなすスキルを身に着けてはきているけれども、その中で、もう少し自分の手の届かないところというか、考えが及ばないところにいっていると思わされたことがありまして。最近入ってくる学生の中には、ネットを使って教育関係の起業ですね、ベンチャーを立ち上げてやっていきたいと。今、そういうこと

をいろいろ自分でも実験していると。

例えば、子供をサポートするだけではなくて、親御さんもサポートしないといけないから、保護者と一緒にネットワークをつくってみて、立ち上げているということを言っていて。なるほどと思わされたのが、要するに、やっぱりネットに依存することは、そこでやりがいのあることなど、見つかっている場合もあるのですよね。そういった意味では、大人がネットの世界に代わる何かやりがいのあることを見せてあげられてないのも問題だと思います。

○竹内和雄准教授

そうですね。

○山下委員

そういった意味では、例えばスマホなどを中高生が積極的に活用して、何か自分でゲームをして楽しむ消費者みたいになるだけではなくて、生産者になっている事例があれば、教えていただきたいと思いました。

○竹内和雄准教授

まさにそのあたりで、セルフヘルプ、これは兵庫県青少年課と一緒にネット依存キャンプ、ネット依存の子らとキャンプに行って、という取組をまさに今、させていただいていまして。ネット、なかなかやめられない子たちと一緒に行っているのですけども、今年は１０人の子が参加して、学生はそこに１０人行くわけですね。

そこで分かってきたことは、断食ではなくて１日に１時間だけネットをしてもいいよという時間があるのです。その時間を、彼らは１日２０時間ぐらいする子たちが来ているので、その１時間を必死でやると思っていたら、１日目はほぼ全員行ったのですけど、２日目、３日目となるに従って、みんながスマホをやっていい１時間に行かなくなるのです。「何でや。」と言ったら、「だって、ネットは家でもできる。だけど、ここでやる缶蹴りとか、カードゲームはここしかでけへんと。だから、もったいない。」と言うわけです。「え、どういうことや。」と僕はすごく混乱したのですけ

ども、結局、彼らは「家で（缶蹴りなどが）できないからネットにいってんのや。」とそこの子たちは言いました。

だから、大事なことは、家でそれができればいいと思って。１年目は、それがなるほどと思って、家に帰ったらまたネットばっかりです。なぜか、「家に友達、おらんもん。大学生、おらんもん。お母ちゃん、遊んでくれへんもん。」、だから、結局私たちはリアルの大事なところの喪失したところで彼らがネットに負けているのではないかと思ったので、楽しい学校、楽しい家庭ができていけば変わるのではないかと。それが一番、山下委員がおっしゃったように、自己有用感というか、自己実現というか。それがリアルの社会でできるようになっていくというところ。

だから、やっぱり答えは楽しい家庭、楽しい学校。特に、学校で文化祭をやっているときにネット依存は減るわけです。おもしろいから。合唱コンクールをやっているときは、ネット依存は減るわけです。学校のほうがおもしろいから。だけど、コロナで教育の成績のために合唱コンクールとか文化祭を削っているわけです。それは、やっぱり逆行なので。今だからこそ、そういうのをしなければいけないと僕は感じています。

○山下委員

今、おっしゃっていただいたこと、すごく私も大事だと思っていまして。

特に、私、リアルも充実させればいいと思いますけれども、もう一歩、ネットも充実させればいいのではないかと思っていて。

○竹内和雄准教授

そうですね。

○山下委員

人間はもう、今から生身の肉体もありますけど、そういう道具とかなり一体化していく、いかざるを得ないところがあるので、そうしたときに、例えば、なぜネットに依存するのかということを、それが人間の本質と非常につながっていることを子供さ

んたちも、小中学生も学んでいただいたらすごくうれしいと思います。

例えば、やっぱり万能感を感じられる。ゲームをしていて自分が思ったようになる。逆に言うと、ふだんの現実ではあまり自分の思ったとおりいくことばかりではないという自己有用感とか、万能感がゲームにのめり込んでいく理由として非常に大きなものがありますけど、これって、人間存在のすごく深いところで関係しているのではないかと考えていただいたり、あるいは、ファンタジーの世界に逃げるのも、同じでつらい現実が一方である。だけれども、大人も実はファンタジーなしには生きていけない。その持ち方が問題だということを考えていただいたり。

あるいは、危ない出会い方もあるわけですけれども。それは、リアルな世界で今まであった縦横の関係以外でも、おじさん、おばさんの斜めの関係がなくて、子供たちがそれをもしかしたら自然に求めているところもあるかもしれない。

いろんなことが考えられるので、この機会に、ネットに関わっている、あるいは依存してしまう自分たちを通じて、人間というものをもう一回深いところから捉え直してもらえたら、それこそ神戸の子供たちがＳｏｉｅｔｙ６．０ぐらいしてくれるかもしれないということを今日、考えさせられました。ありがとうございます。

○竹内和雄准教授

まさに、そのとおりで、ネットが悪いわけでは全くなくて、ネットで充足できるのだったら、ネットで僕はいいと思うのです。

今、まさにどういうことが起こっているかというと、Ｎ高は御存じでしょうか。Ｎ高と言ったら、全部ネット上で勉強できるわけです。ＫＡＤＯＫＡＷＡやドワンゴがやっていて、１年間に５日間だけスクーリングと称して沖縄などに行ったら単位が取れる。ネットで解決するわけです。Ｎ高の次はＳ高ができたのですね。そこの子が東大にも行ったということで、すごく親御さんの希望になっているのです。

だから、中学校から高校はＮ高があるからということであまり焦らなくてもよくなりました。お母さんは、「そんな、リアルな学校に行ってほしいと。部活とかやっ

て。」と言ったら、子供は、「ｅスポーツ部があるもん。」、なるほど。「そんなん、社会に出てから人間関係、リアルな人間関係を築いとかんと無理やろう。」と言ったら、「最近、リモートワークやもん。」と。

よく考えたら、ネットだけで完結する社会にどんどんなっていっています。だから、「ただ」、「でも」というのはやっぱり子供たちも感じていて。でも、リアルの５日間を思ったら、やっぱりネットにいるより、リアルにいるほうがよかった、という子もいます。オフラインキャンプに来ていて、１日２０時間していた子らが、今年こう言っていまして、いまだに僕は家庭訪問をしていますけど。その子がこの前行ったらＮ高に行くと。やっぱりそうかなと思ったら、リアルの登校もあるＮ高があるのですよ、三宮に。「何で。」と言ったら、「やっぱり同世代の子と絡みたい。」というわけです。「彼女が欲しい。」これは重要でしょう。「ネットやったら二次元やもん。」と言うわけです。

これは重要で、なるほどと。だから、そのあたりのリアルの楽しさ、それをオフラインキャンプの中でお兄ちゃん、お姉ちゃんとか、周りの子供たちとやったらそれはおもしろいということを、やっぱりそういうリアルを体験する場が要るし、ないといけないのだろうと。結局リアルもいいけど、ネットもいいけど、リアルの側のおもしろさというのは僕たちは忘れたらいけないと思いつつ、置き換えられるところはネットで置き換えたらいいのではないかと僕は今感じています。

○梶木委員

どうもありがとうございます。私、先ほどのユニセフの方がおっしゃった道路の話が非常に印象的でして、やはり、危険に遭うことがネットの社会、特に子供たちが使う場合はいろんなトラブルに遭うことが想定されるわけですね。きっと、それが子供たちも怖いところだと思うのですけれども。

怖いことを前提にするのであれば、怖いことがあったときにどこに駆け込めばいいか、そこが、一番子供たちが知りたいところだと思います。

けがしたときに、なぜけがをしたのか。次やめとこうと同じことを二度としないための駆け込み寺的なところ、そういう大人。親にはなかなか言えなかったりします。「あ、課金しちゃった」というときに、すぐにヘルプを言える。それこそ、斜めの関係の駆け込み寺的な人がネット対応でいたら、随分子供たちは安心するのではないかと。

やっぱり、二度としなくなりますね、そんなことを何回もしたいわけではないので。

だから、今後必要になる部分と思うところです。

もう一つ、今のお話だとみんなネットでものすごく楽しんでいるとか、それを活用している子供たち。でも、実は大学でも意外とできない子もいるのです。その子たちがきっとどこかでこぼれ落ちていっていて、何か社会に入れない。そういうどうしてもネットの中でうろうろするのが無理な子たちを、今後どうしていってあげればいいのかという議論はなかなかされていないと思うのです。

何かアイデアがあればと思います。

○竹内和雄准教授

アイデアはないです。ないですけども、そういうネットに入れない子もいるよと私は昔から思っていたのですけど、初めて、私以外の方が言ってくれたので。そういう共通の認識になったのだと思って、とってもうれしいです。

それと、先ほど言ってくださった相談というところですね。子供たちが今回言っていたけども、面談がしたいというわけです、ネットについて。そのようなこと中学生は言わないでしょう。先生に言われたら怒られますので。僕も中学校の教員で、三者懇談だったらお母ちゃんと一緒に言われるから嫌なわけです。だけど、先生に聞きたいというわけです。「何で聞きたいねん。」と。「だって、分からんもん。」そしたら、そこにいた先生が、「俺も分からんで。」と言われました。「でも、分からんでも、知ってる人が知っといてくれたらいいやんか。」というわけです。

「だから、先生が知らんのは分かってるから、いろんな相談の窓口のチャンネルを

教えてほしい。」と子供らは、私たちに言って、それがないのが一番つらいと言っていました。

だから、まさに私たちがそういうチャンネルを増やしてあげたり、ここに言ったら分かるなど、そういったものをどんどん増やしていければいいと思います。

今回のネットフォーラムを長くもっと配信して、いろんなひとに見せたらいいと、子供たちにもっともっと問題提起をしながら、「俺はこれが言いたい、あれが言いたい」ということを本当に風通しのいい学校にしていけばいいと思います。

それで、うちの学生たちが本をこの前作ったので見ていただきたいのですけれども。

小学生向けの教材をうちの学生たちが作ったのです。これは、ダウンロードしていいアプリか、ダウンロードしたらいけないアプリかを子供たちに考えさせるわけです。ネットをずっと使っている中学生ならすぐ、「これ、あかんわ。こんなもん。」と言います。分かりますか。

中学生は簡単だったので、大人は簡単だろうと思ったら、教員研修ですると先生たちがもう全然分からないのです。中学生は一瞬で答えます。分かりますか。

○久元市長

「友達協力し、最強いい仲間を集め協力対戦。プレイヤーは万国歓迎。」変な文章です。

○竹内和雄准教授

変な文章、そうなのです。これ、文章がおかしい。いわゆる、翻訳できないアプリはまずいというわけでしょうね。

子供たちはもういろんなことの中で、これは危ないと何となく分かるわけです。でも、学んだわけではないので、横で「私、フィルタリングがかかってるからそんなんやったことない。やばい。」と中学生が言うわけです。

左側は分かりますか。

○本田委員

電話帳。

○竹内和雄准教授

そうです。なぜ。

○本田委員

個人情報。

○竹内和雄准教授

そうです。電話帳があるから個人情報が抜かれる。そしたら、真面目な生徒会長の女の子が、「何で電話帳はあかんの。」と言うわけです。なぜですか。

○今井委員

個人情報。

○竹内和雄准教授

そうです、電話帳の情報とか、電話番号が抜かれるからいけない。こんな感じで子供たち自身にこれが危険だろうと。僕らが小さいときに小学校１年生に赤信号はいけないと教えますね。それから、自転車に乗るときはコマつきで三輪車をやります。その教育がネットに関してはなくて、いきなり使いなさい、少々へましたらいい、と。でも、けがしたらえらいことになるので。そういうのが今はどこにもないわけで、必要ではないかと。

今、神戸市では、神戸市教委はもともと５・６年生を対象に授業をしていたのですけど、今は３・４年生にやっていて。学期末の３月の２０日ぐらいに僕に電話がかかってきて、小学校１・２年生にもパソコンを配るから１・２年生用の教材を作ってほしいと言われて、学生ともうひいひい言いながらやったのですけど。１年生なんかはスマホなんか分からない子ら。でも、やっぱり使うから要るということで今教えていますけど。そこまで今来ている。だから、こういうことをやっぱり友達と一緒に考えていく時間が要るのではないかと。

例えば、この３番、４番は４００しかダウンロード数がないとか。１７プラスだか

ら君らは小学生だからだめだよとか。この程度のことを、僕らは何となく学んできています。だけど、今おっしゃったように、そういうことも分からないままつないで、いろんなトラブルに巻き込まれている子もいます。

今、ネット上でよく性的な問題に絡む子たち、「そんなことにひっかかるわけないやろう。」というと、本当にひっかかっているのです。私、いろんな子のケアをしていますけども、

だから、そういう子たちが安心してネットを使えるような、そういう社会も要るのではないかと今思っています。

○長田教育長

竹内先生がうまく子供たち、生徒たちの本音を聞き出していただいて非常に分かりやすいお話をいただきました。ありがとうございました。

やはり一番に思いましたのが、３年前と比較をしてどうしてその生徒たちの意識ががらっと変わってきたのかというのは非常に関心があるところですけども、いずれにしても、やはり、かなり煮詰まったところといいますか、生徒たちも追い込まれているといいますか、一種のＳＯＳ的なことなのだろうということで。我々、大人がやっぱり正面からきちっと受け止めて、ともに考えていく必要があることを強く感じました。

やはり学校なり、教職員も十分にこの今の子供たちが置かれている現状の認識をしないといけませんし、当然、授業の中でも生徒たちの要望にあったとおり、具体的な事例を挙げて、こういうことをやっているとこういう危険を伴うと、こういう犯罪に巻き込まれるおそれがあるという具体的な授業をやっていくことについては、教育委員会としても取り組まなければいけないと思いました。

それとともに、その学校と教職員だけではなく、一番気になりますのが保護者、家庭の意識、認識ということです。このコロナ禍の下で、昨年度、兵庫県が心のケアアンケートを、県下の小中学校全校ではありませんが抽出をして実施をしていまして、

神戸市内の小学校、中学校８校ずつ１６校が参加をしましたけれども、その中に長時間ネットを使用している時間、例えば、３時間以上ですとどれくらいのパーセンテージか。子供自身の回答は大体３２％と答えていますが、保護者は２６％。

やはりここに開きがあります。そういう意味で、保護者自身も自分のお子さんがどれぐらいネット依存というか、ネットに時間を使っているかということをしっかりと正確には把握しておられない。もちろん、非常に熱心な関心のある保護者の方もたくさんいらっしゃるとは思いますけれども、そういう意味で、やはりこの家庭をいかに巻き込んでというか、ともに御家庭と一緒にこの問題を考えていくというのが大事である。そういう意味で、このあたりいい方法があればまた竹内先生の御意見をお伺いしたいと思います。

いろんな生徒たちが言われた情報発信の方法もあるでしょうし、例えばこの４月からは保護者との連絡ツールも導入しましたので、ふだんは児童生徒が欠席をするときに連絡をしてもらうツールですけれども、その中で、教育委員会なり、学校から保護者の方々に発信をすることも可能ですから、そういったツールも利用しながら、いかに御家庭の中で子供と一緒に保護者の方がともにルールをつくって考えていく方向に結び付けることができるのかという、具体的な何か方策を考える必要があると思いました。

○竹内和雄准教授

教育長、さすがです。すばらしい御意見だと思います。

まさに今そのあたりで、僕の一番の関心事項は親子の問題。特に、乳幼児の保護者の問題が今一番あるのですが、今はそこを置きまして。

今まで悲しい歴史があるのですね。学校はネットの問題は親の問題だろうと、学校に押し付けるなと言ってきたわけです。親は、分かりつつなかなかできないけど、学校が決めて、というわけです。学校が決めてと言われた香川県は、条例をつくったわけです。そうすると、憲法違反で訴えられるわけです。チャンネルは行政ではないと

思っています。

だけど、やっぱり親もしないといけないし、でも親だけでは無理なので。この前同窓会があったときに、「私は子供にはお小遣いはラインペイ、ペイペイで渡してる。」と言うわけです。どう思いますか。

○本田委員

そういう時代ですね。

○竹内和雄准教授

そういう時代ですね。「いやそんなん財布で減れへんからあかんやろう。」と言ったら、「いや、履歴が残るもん。」と。「でも、そんなん言うたら、駄菓子屋で買われへんやん。」「いや、うちの子は全部コンビニでしか買わへん。」と。だから数字で出るから管理がしやすい。何か嫌でしょう。僕は納得がいかないです、絶対に。だけど、「それは先生、老害や。」と言われました。だから、僕らも変わっていかないといけないというのが一つ。

もう一つが、近隣の都市のネット依存の割合です。３万人のデータです。これは２０２０年のコロナ明けです。すごいでしょう、天文学的な数字です。高３ぐらいになったらもう３割を超えているわけです、ネット依存が。倍増です。

なぜこんなことが起きているか、高校生が実は一番悲鳴をあげていて、中学生まではまだ親が管理してくれると。だけど、高校生になったら自分の部屋で自分に与えられて、もうそろそろ、いろいろ口出ししないからねと言われて。私たち、そんなに自分でできるほど大人じゃないと言うわけです。

だから、まさにそういう親が自立と言っていましたけど、子供たちが自立と他律のはざまで、自立できるはずだった高校生が自立できてなかったわけです。先ほど山下委員がおっしゃいましたけど、大学生なんかはもうネット依存大変な子はたくさんいます。僕の教え子で、ソーシャルメディア研究会でネット問題をしていますけど、ＴｉｋＴｏｋを２時間ぐらい見てしまって、もうどうしようもないと。あれは１時間で

制限をかけるから暗証番号で１時間したら、暗証番号を覚えているから、してしまうと。だから、上を向いて分からんように暗証番号を押していると、漫画みたいです。それが、そうやるとできる。逆に言うと、そこまでやらないとできないというか。彼らは今そこまで追い込まれているというところがあります。

親の問題でもない。学校の問題でもない。社会の問題だということでチャンネルが僕らにあって。だから、僕らが大人と子供で一緒に考えていくというか、何かそのあたりがこれから一番大事なのではと思っています。

○久元市長

この子供たちの取組は大変すばらしいと思うし、これはぜひともやってほしいと思いますけれども、率直な疑問として、子供たち自身がどれだけ時間を使っているのか、テレビとか、勉強とかありましたね。

正直、これだけ勉強してないということでしょうか。

○竹内和雄准教授

そうです。

○久元市長

それで、教育大綱の一番目は学力の向上ですよ。このままでいいのでしょうか。

○竹内和雄准教授

絶対いいわけない。ないけど、子供らは、今何となくそれで子供に任せたらいいという感じをかいくぐってやってしまっているわけです。子供ら自身も、やっぱりまずいと、もう思っているわけだから。今やらないと、いつするのか。勉強しないといけないですよ、子供らは。子供らもそう言っていました。ただ、どうするかですね。

○久元市長

この総合教育会議の任務は教育大綱を実施していくこと。どうしたらいいのかということで、その間いろいろな問題があったので議論があちこちいきましたけれども。

今日は、この６番目、７番目にあるような文脈から議論して、いずれ、学力の向上

を議論していただきたいと思います。そのときに、このネットでこれだけ勉強しないようになっているということも。

○竹内和雄准教授

そういうことです。

○久元市長

かなり重要な事実として、教育長、議論しないといけないですね。

○長田教育長

これは、教育大綱の１番、７つのうちのトップに学力の向上ということを掲げているわけですから。学力テストの結果を見ても、この向上が一番の課題であることはみんなの共通理解だと思います。

さっきの数字を見ましても、結局勉強時間が一つも変わらずにテレビが減ったらスマホが増える、ネットが増えるということ。非常に寂しい限りです。このあたり、実はＧＩＧＡスクール構想で一人一台端末の配布がこの４月から始まったわけですけど、いろんな問題があって少し話がそれるかも分かりませんが。ＹｏｕＴｕｂｅをその端末で使うことができるのかと。使えるようにするのか、しないのかという問題がありまして。いろいろ議論をした結果、小中学生とも、とりあえずスタート時ではＹｏｕＴｕｂｅを見られないように設定をしています。

これは、いろいろな御意見があって、見られるようにすると当然非常に学習に有効なものがいっぱいありますけれども、ＹｏｕＴｕｂｅの中には。ただ、いろいろな遊びに、ゲームというのもたくさんありますから。そういう意味で非常に危険ではないかというリスクが大きいのではないかという意見もあって今見られないことにしております。

ただ、うまくこのスマホに慣れている子供たちが一人一台の端末をうまく活用して、それを遊びながら勉強に活用できる方向にもっていければ、本来一番いいのではないかという気がしています。

いずれにしても、学力の向上に向けて対面の授業、勉強もしながらこの端末なりをいかにうまく活用していくのかというのが今後の課題ではないかと考えております。

○久元市長

ありがとうございました。

○竹内和雄准教授

１つだけ言いたいのですけれども、今、まさにそこがポイントで、どういうルールをつくるかが問題なのですね。ある私学に私、関わったのですけれども、私学なので何でもできるわけです、理事長がいいと言えば。スクリーンタイムといって、入るときに全員一日何時になったらスマホが切れる設定をしなさいと言うわけです。無理やりやると。学力が急激に上がりました。でも、公立だからそれはできませんよね。

○長田教育長

１００％は無理です。

○竹内和雄准教授

１００％は無理だけど、ぜひやりなさいという号令はかけられます。だけど、その私学はやらなければ入学を認めないということでばーっと入れるわけです。でも、それは僕はある面正解、ある面反対です。

だから、強制的に１０時になったら切れる設定をするわけです。これは、小学校の２年生ならまだ効きます。３年生もまだ効きます。４年ぐらいになったらだんだん効かない。だんだんそれが８時から９時、１０時とだんだん増やしていったらいいのではというのが大きな一つの問題です。

あと、兵庫県でおこなったデータですけれども、ネット依存傾向のない子はたくさんルールを破ったことは少ない。当然、ネット依存傾向がある子はたくさん破ります。だけど、生徒会とか友達のルールはあまり破らないです。だから、ここから上がることは子供らで考えさせるのが一番だということがまず分かります。

２つ目、親のルールはだめなのかというと、話し合いをしっかりしたらルールを守

ることが分かってきました。だから、ちゃんとお互いが腹落ちして納得したら守るわけです、子供たち。ネット依存でも効くわけです。

だけど、高校生になったらもう効かないです。高校になったら遅い。小中学生のうちにやっとかないけないことがだんだん分かってきました。

だから、私たちはそれを踏まえて、親子でどういうルールをつくるか、つくらないか。学校としてどういうルールをつくるか、つくらないか。まさにそこが勝負で、先ほど梶木委員がおっしゃったような、相談ともう一つはルールづくりというところに焦点化していくのがいいのではないかと思います。

○久元市長

ありがとうございます。

○竹内和雄准教授

また、ぜひ提案させてください。

○久元市長

今日の議論を踏まえて、具体的に例えばアプリの話もありました。これをどういうふうに周知、徹底するのかということについて、もし企画調整局と教育委員会、それぞれお考えがありましたらちょっと説明いただければと思います。

○企画調整局政策調査課長

企画調整局でございます。今のお話を受けまして、ワークショップとフォーラムを開催させていただいたところでございますけれども、その中で、お話がございましたように、保護者や先生など大人と一緒に考えたいという提案がございました。

これを受けまして、小中学生や先生、保護者、それからアプリの開発の事業者の方、それから専門家ですとか、職員などで構成しますプロジェクトチームを立ち上げたいと考えております。このプロジェクトチームの中でアプリの仕様ですとか、３年前にスマホ３カ条というのをやっておりましたけれども、それの更新を考えていきたいと考えてございます。

あわせて、ネットに関する啓発も進めていきたいと考えてございます。特に、保護者の方向けのポスターの作成をしていきたいと。今、デザインが出ておりますけれども、少しこういったデザインをブラッシュアップして、今先生からもお話がありました、アンケート結果等で得られましたファクトを盛り込みながら、保護者の方に問題意識を持っていただきまして、お子様と一緒に考えていただくと。そういうことを啓発して、今後デジタルサイネージ等で広報をしていきたいと。

また、ホームページ等でも詳細なアンケート結果を掲載して誘導していきたいというふうに考えています。

○長田教育長

教育委員会も、今の課題を踏まえた今後の取組を考えてございます。事務局から御説明どうぞ。

○教育委員会事務局学校教育部長

教育委員会の今後の取組でございますが、上の３点につきましては、先ほど教育長からも少し触れていただきました。低学年への指導啓発のための新しい教材を開発。あるいは、中学生への教材、これも少し開発して取り組んでいこうと。それから、家庭における情報モラルの向上ということで、学習用パソコンを用いて親子で使えるようなものを考えていきたいと考えてございます。

それから、下の枠組みですが、先ほど企画調整局からありました、ＰＡＳＳＫＯＢＥのアプリにつきましても、モデル校を設置してその効果検証を、児童生徒、学校、保護者、ＰＴＡと一体となって推進していくというモデル校を設置していきたいとに考えてございます。

３．閉　　会

○久元市長

どうもありがとうございました。こういう形で進めていければと思います。また、

教育委員会としても議論をしていただいて、学校での取組を進めていっていただければと思います。

では、今日は竹内先生、大変有意義なお話をありがとうございました。

○企画調整局教育連携課長

市長、ありがとうございました。

改めまして、竹内先生、本当に今日はお忙しい中ありがとうございました。

今後の総合教育会議ですが、本日の議題にも出ておりました、教育大綱の実現に向けまして引き続き進めてまいりたいと考えております。議題と時期につきましては、改めて御相談をさせていただきたいと思っておりますので、これをもちまして、令和３年度第１回の神戸市総合教育会議を閉会とさせていただきます。